

六二四 華山筆月下鳴機圖

東京 男爵 岩崎小彌太氏藏

絹本着色 挂幅装 横 一・二七〇（四尺一寸九分）
五・六・三〇（一尺八寸六分）

古來君侯の居室に用ふる障屏に、四季耕作を圖したことその遺品にこれを見出すが、殊に君侯の徳は庶民の勞苦を知るに在つて、富國の基は農業に在ると云ふ儒教思想の行はれた江戸時代に於ては、この耕織を畫題として筆作されたものが多く残つて居る。本圖題して月下鳴機と稱するが、耕織の一圖たること云ふまでもない。

今や山端にかゝる月輪のもと、水邊の家屋のうちにあつて、燭の光をたよりに一は糸を紡ぎ、一は渡り廊下に燭を持す侍童に案内されて歩を運び、一は機臺に倚つて梭を鳴して餘念がない。いづれも楚々たる唐美人の容姿を描いて、江南水村の月明の夜景を髣髴せんと企てて居る。いづれは唐本により、その構想を學んだものであらうが、遠景の山容、中景の水邊、さては樹木や家屋の布置された近景に至るまで、その一々はわが風土の寫生を基礎として圖寫され、その中にわづかに唐人物を配置したに過ぎない。たゞその唐人物を借りて江南の風土を想像裡に圖したところに、當代文雅の好尚を如實に示すものがある。而も本圖その畫意に於ては清朝文化の影響に立つものでありながら、その描寫法に於ては當時舶載の洋畫手法が攝取されて、その遠近法の正確な點や樹木岩石の精寫され、且陰

影の施された點など寧ろ驚嘆に値する。

またその潤墨の筆致の妙とその設色の簡淨なものと相俟つて、一種透徹した畫致を醸成して居る。尙細視すれば、月光に照された白壁の土塀、淡藍の上に焦墨をもつて細描した竹林、さては風渡る水面や岸邊にゆらぐ蘆荻、また梧桐のもとに朱紅の花をつけた鶏頭などすべて爽涼たる秋色が月明淺夜の景に巧に收められてゐて、華山一代の佳作たること誰も認めるところであらう。

畫上の一隅に「青燈暎幃幙。絡緯鳴井欄。辛勤度幾梭。始復成一端。寄言羅綺作。當念麻苧單」の題詩と「華山外史寫時己丑八月四日也」の自署があり、その下に「華山」白文と「登」朱文二重廓橋圓形の二顆が捺せられて居る。己丑は即ち文政十二年にして、華山三十七歳時に當る。然るにこの畫致の極めて清醇な點は彼の晩期の筆をまたねば到底なしがたい。年記の遡及してあるは田原幽居に於て製成したことを語るものであらう。因にこの卷留に「華山先生月下鳴機圖神品」の野口幽谷の題詞と「壬午五月中潛鑒於東京護國艸堂」と云ふ小華の鑒が貼付されて居る。

華山筆月下鳴機圖
（原寸）印款

